OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ニューヨークにおける高峰譲吉自邸の建設経緯と室内意匠
Author(s)	玉田, 浩之
Citation	デザイン理論. 2008, 53, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53423
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ニューヨークにおける高峰譲吉自邸の建設経緯と室内意匠

玉田浩之／京都工芸繊維大学

１．はじめに

1912年に竣工した高峰譲吉の自邸はアメリカという異国の地において本格的な日本の建築意匠を試みた貴重な事例となっている。高峰の自邸は1927年に焼失しているため，現在その姿をみることはできないが，設計施工に携った牧野克次の記した報告書から断片的ながらその詳細を知ることができる。本発表では上記史料を中心として高峰譲吉自邸の建設に関わった人物と建設経緯と意匠的特質を明らかにし，その歴史的意義を考察することにより日米建築交流史における高峰譲吉自邸の特異な位置の確認を試みる。

２．自邸建設の経緯

高峰譲吉は1854年の加賀藩の高岡（現富山県高岡市）に生まれ，1872年に工部省の官費修技生となった後，1879年に工部大学校の応用化学科を卒業する。卒業後の３年間は英国にて化学を学び，1883年の帰国後，農商務省御用掛となる。1890年には米国に移住し，タカジアスターゼの発明やアドレナリンの発見によって，高峰は世界的な成功を手に入れた。1897年にニューヨーク市内へ移住し1905年にはニューヨーク郊外に別邸として松楓殿を構えた。1909年の夏，マンハッタンのリバーサイドドライブ334番地に自邸の建設を構想し始め，1912年に自邸を完成させている。高峰は，自邸の構想を既に松楓殿（セントルイス万博日本館を移築したもの）の室内装飾を担当していた牧野克次（1864-1942）に委嘱した。牧野は大阪出身で静岡師範学校と大阪高等工業学校で教えた後，1902年に京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）創設時に図案科の助教授として勤務した。牧野は1902年から1906年まで京都高等工芸学校の図案関係科目を担当していたが，洋画研究のため1906年に同校を退任し，京都高等工芸学校第一期卒業生の村山順と霜島正三郎らと共に渡米した。アメリカではニューヨーク美術学校で水彩画を教えながら洋画の研究を行い，同時に日本画の紹介にも努めていた。牧野はニューヨークでの活動を通じて高峰と親交を深めることとなる。その後1906年頃に松楓殿の室内意匠を依頼され，1908年には高峰自邸の室内装飾の設計を請け負うに至っている。

牧野は小山正太郎に学んだ洋画家であり，正規の建築教育を受けた人物ではなかったが，京都高等工芸学校時代には洋画家浅井忠と建築家武田五一の両教授らとともに図案学の科目を担当していたことから室内装飾についても十分な見識を持っていたと考えられる。

３．自邸建設の基本方針

高峰の最初の希望は「全部日本式とし，第一階は奈良朝の雄大なもの，第二階は藤原式の優麗なるもの，第三階は鎌倉式に室町式を加えて閑雅なるもの，第四階は桃山式の燦爛たるもの，第五階は徳川中世以降の式を取り，別に茶室を設け，室内装飾を歴史的に作らん」というものであり，いわば日本の室内装飾カタログを実験的に作ろうとしていた。しかし最終的には，外国での生活しやすさを考慮して「第一階と第二階を日本式，その他を洋式」へと方針転換をしている。また他の部屋との調和を考慮し，主として藤原時代の装

飾を用いて「一部に室町式と徳川式を加味して」設計したとしている。しかしなぜ，牧野は藤原時代の装飾を主に採用し，それを啓発すべき日本趣味と考えたのだろうか。この点について牧野は次のように説明している。「前期奈良朝以来の支那模倣を優美豊麗に醇化したる時代なるを以て，豊麗なる装飾にはこの時代のものを採酌するを最も適当と認めたり」。藤原時代の装飾を選択した理由は日本が中国の模倣から脱却したのは藤原時代にあると考えたからであった。この考え方は1900年のパリ万博に伴い出版された『稿本日本帝国美術略史』で示された歴史観と共通することから，牧野の見解は当時広く受け入れられていた歴史観を反映したものであったと考えられる。

一方で，藤原時代の建築意匠を採用するにはひとつの問題があった。牧野は「惜しむらくは模範建築物の現存するもの極めて少なく，僅かに宇治平等院鳳凰堂を除きては概ね小規模の一部に過ぎざるなり」と記しており，参考事例に乏しいことを憂慮していた。そこで，牧野は京都高等工芸学校校長であった中澤岩太（1858–1943）に協力を要請し，平等院鳳凰堂大修復の監督技師であった同校教授の武田五一（1872–1938）の援助を受けることとした。武田は1912年の論考の中で，「此時代（藤原時代）は諸般の芸術いずれも進歩せる時代にして，絵画彫刻大に発達し，建築の術においても，前期の如き隋唐の直写の時代を脱し，其 Proportion 及 Detail に於て，非常に繊細なる技術を弄したるの形跡あり」と述べている。また武田は日本の特殊な材料の供給に関しても協力した。したがって室内をデザインする過程において，武田の存在は非常に大きかったと考えられる。牧野は京都高等工芸学校の全面的な支援を得て高峰邸の設計工事を進めていたことがわかる。

施工のほとんどは，当地の職人によって行われた。折上天井，勾欄の一部，床脇の違い棚，障子，欄間などの特殊工作物は日本において製作され，現地で組み立てられた。高峰邸の建設に協力した業者は，山中商会のほか，京都野村商会や京都川島織物の職人たちであった。山中商会はセントルイス博覧会に出品した経験を持ち，さらにニューヨークに支店を構えていたことから高峰邸の建設に大きく貢献したものと思われる。

4．おわりに

自邸の建設当初，高峰は「日本趣味を外国人に紹介し，ホテル若しくは公会場の装飾にも応用せしめんとの意向」を持っていた。この意向は万国博覧会の日本館に共通するものである。高峰は万博日本館の延長上に自邸を位置づけ，周到に準備した上でもうひとつの「日本館」を建設しようとしたと考えられる。

引用文献

牧野克次『高峰邸』高岡市立図書館蔵